止 めて」ふいいに少女が言った。馬車が止まる。少女は首をぶり美しく結い上げた髪を降りる。外に老婆が立っていた。「いいのかい」「もちろん。きっとがある気がするのよ」少女はガラスの靴を老婆に返す。そうして裸足で歩き出す。城でも家でもない方向へ。

才 ペラのＶＩＰ席。男が連れに囁く。「父はオペラが好きでね。子供の頃時々付き合わされた。退屈で迷惑だったね」「ふうん」「だが父は事業に失敗して死に、私は貧困に落ちた。もう一度ここに働いてきた訳さ」「それで戻ってきた感想は？」「やはり退屈だねぇ」

友 人は時計職人だったが、妹を亡くしてから逆回りの時計しか造らなくなった。数年ぶりに彼の家を尋ねると、「そろそろ君を呼ぼうと思ってた」と笑う。逆回りの時計だらけの家の中に、リドーが、オオウミガラスがいた。僕の最愛の恋人が。

ら 歳の娘と海にゆく。ずっと娘の世話をしていた旧式のお手伝いロボットが数日前に壊れた。合う部品もなく修理はできなかった。僕は大泣きした。娘はロボットをくり抜いて中へ入る。娘と手を繋いで海ををママと呼ぶ。パパに貝殻をお土産にしてあげるのと笑う。

原始の海で僕らは歌う

twnovel おりほん
7
〜再生編〜

もういちど
生命の起源からはじめよう
原始の海で僕らは歌う

この内容は、suwazo が 2012 年 5 月〜2013 年 4 月にかけて twitter で呟いた twnovel（※140 文字、ただしタグを除けば 131 文字の小説）のうちの 11 本に、新作を 1 本加えたものです。
suwazo@twitter
2014 年 1 月

百 年にわたり都市を管理してきた巨大コンピュータが取り壊される。新しいシステムは既に完成している。触体処理のさなか、コンピュータの中に胎内仏よろしく眠っていた小さなコンピュータが発見される。人型の。共に目覚める。新システムの網を破壊し、跳ぶ。

彼 は毎日図書館へ行く。司書は予め用意し事故で記憶を失くした彼に貸し出す。彼は覚えていないのだ。目分が本なんて読んでなかったと。司書に会うために図書館に通っていたこと。

魔 法使いの弟子は地下室で怠惰を貪る。弟子とはるばかりで、初歩の魔法一つ教えて貰えず、奴隷同然にこき使われた。骨と皮ばかりの骸を鼠がかじる。数年後、王都に奇妙な魔法使いが現れる。「魔法を使わない魔法使いが。」彼が引き連れた何千という鼠は、あらゆる魔法を喰い、無効化する。

彼 女が雪原の向こうを指さす。ほら。あの貧っ白い兎は、雪ウサギが兎になったもの。あっちの耳先がボいもの兎は、かつてウサギリンゴだったもの。振り向くと彼女はいない。貧っ黒い兎が雪を蹴りながら行ってしまう。あれは私。殺しがりの兎は仲間の元に行くの。彼女の声が遠くなる。

攻 撃を受け機能停止したロボット兵の私を、人間兵が拾って運れ帰ってくれた。拾って置けば良いものを。しかも彼は私を傷攻で直してくれた。ろくな部品もないものを。朝、祖父の形見だという彼の腕時計が分解されているのを見た。私は腕時計になったのだと思った。そして彼を守ろうと。

行 くのかい？　行くよ。行っておいで。吟遊詩人は世界のすべ削。猫は最後のお別れをする。吟遊詩猫は、宇宙をわたる船に乗る。吟遊詩人が教えてくれたすべてを歌うために。そして新しい歌を歌うために。ニャア。

病 院で知り合った老人と賭け将棋をする。元殺し屋だという。僕は勝ちをためては人を殺して貯めた。僕をズタボロにして病室に縫い付けた奴らを一人ずつ。あとは僕自身を殺して貰っておしまい、のつもりなのに、今日はなぜか全く勝てない。老人が笑う。「俺ァ仕事は選ぶのさ」

「夢 が見られないの」少女は言う。夢から工ネルギーを取り出す技術は確立したばかり。美しい物語を語すも失われた。燃命に美しい世界や肩の。青年は知らない。少女が機械であることを語る。青年は弱張って少女を愛する。もつ花や蝶や海や虫のエネルギー源は少女ではなく青年であること。